



『……ん？』

「お、目を覚ましたか」

偽の情報に惑わされ、
奇襲を受けた月海亭の秘書、甘雨は、
気が付くと見知らぬ部屋で
拘束されていた。

気を失っている間に、
おそらくどこかの施設に
連れてこられたのだろう。
身に着けていたものは全てはぎとられ、
手足に装着された拘束具は
振りほどこうにもびくともしない、

あたりを見回してみると
「得体の知らない何か」が
壁や天井の隙間から侵入し
不気味にうごめいている、
まるで、甘雨の様子を伺っているかのよう……



「よし、では始めるぞ」

声がする方を見ると
見覚えのない男たちが、
別の部屋と思われる場所から
窓越しにこちらを観察していた。

男たちは笑みを浮かべながら
どこかに合図を送っている。
しばらくして、部屋の中を
うごめいている「何か」の
気配が変わった気がした

（足元の方から何か近づいてくる……）





ズグッ

ズグッ

触手のような物が
性器へと突き刺された。

ズブツ
「うああっ！」

太い……
最初に浮かんだのはそれだけだった。
触手のようなものは粘液を
膣内に塗りたくりながら、
ミチミチと音立てて乱暴に掻き回す。

ビクッ
甘雨は余りの衝撃に身体をビクつかせ、
どうにか拘束を解こうともがくが
何の意味なく、
ただただ泣き叫ぶことしかできない



クワッ

クワッ

グワッ

グワッ

クワッ

クワッ

グワッ

グワッ



キラッ

あぁ

キラッ

ゴリッ

「あああああッ」

「お、尻穴にも入ったな」

触手のようなものが
後ろの穴にも入り込んだ。
その一瞬、
子宮口を緩めてしまった……

子宮に侵入した触手のようなものは
粘液をまき散らしながら暴れ回り、
お腹がポコポコと不気味に波打つ、

触手のようなものは前から後ろからも入り込んでくる。
その苦痛が少しずつ快感に変わっていきくのをお腹は感じていた……

クグッ

























数時間後……

男たちの姿は消え、
甘雨は闇の中で
なぶられ続けていた。

体内に入り込んだ
触手のようなものは
ずっと動き続けている。
もう何回絶頂したかも
分からない。





ビュグツ...

突然お腹の中で
何かはじけたような
不快感を感じた。

《体の中で液体を噴き出している...》

お腹がさらに膨らみ、
液体が身体を
満たしていく...

《このまま出されたら...》

ビュグ

フビュツ



ゴッポッ

ジュルッ

ジュッ

ぽっ

ジュルッ

ジェル状の液体が口から噴き出した。

（いれって…）

考える余裕はほとんど無い、
とめどなく液体を噴き出され、
身体がどんどん熱くなっていく

ゴホッ

ゴッ

ジュッ





キーン

キーン

キーン

♡♡

キーン

触手のようなものが
更に奥へと入り込んでくる、
先ほど噴き出したジェル状の液体もあり、
勢いよく体内を突き進んでくる。

（ま……まさか、）

これから起こることは
容易に想像できる。
すでに胃を通り過ぎ
食道を異物が登ってきていた。

ビクッ

ビクッ

ビクッ

ビクッ





ずりりゅっ

体内を貫通した…
液体をまき散らしながら出てきた「それ」は
貫いた後も動き続けている。

快感で頭が回らない…
無意識に嗚咽が漏れ、
身体が大きく跳ね続ける。



ズッ

ズッ



クワッ

クワッ

グリュ

グワッ

グワッ

クワッ

グワッ

グワッ

グワッ

絶え間なく続く絶頂、
敏感になっでいく身体、
心も体も壊されていく感覚……

体内を好き勝手に弄ばれ、
快感で押しつぶされた思考で
この地獄がいつ終わるのかを
必死に考えた。

だが、この責めは甘雨が
完全に壊れるまで
終わることはない

これから先、
甘雨が正気でいる限り……

んっ♡

ビクッ

んっ♡

ビクッ

グッ

グッ